
吉岡眞之先生を送る

仁藤 敦史

本館研究部歴史研究系の吉岡眞之先生は、2010年3月をもって本館を定年退職されることとなった。先生は、1996年に請われて、宮内庁書陵部編修課長から本館歴史研究部教授に転任され、以来十数年間にわたり、古代研究部門において古代文献の書誌を中心として研究を継続されてきた。以下では先生の略歴とこれまでの業績を簡単に紹介することで送ることばとしたい。

吉岡先生は、1944年に京都府乙訓郡（現京都市南区）にお生まれになった。東京都立九段高等学校を卒業された後、1964年に東京大学教養学部（文科Ⅲ類）へ入学された。1970年の東京大学文学部国史学科卒業後は、東京大学大学院人文科学研究科（国史学専攻）修士課程に進学され、古代史を専攻された。当時は東京大学の古代史の教授であり、後に本館初代館長となられた井上光貞氏に師事されている。後述するように、『続日本紀』や『令集解』などの諸本について書誌的な業績をあげられるきっかけは、井上光貞氏が開始された『続日本紀』や『令集解』などの註釈書編纂事業との関係が深いものである。この頃から歴史学研究会古代史部会でも活躍され、「書評『講座日本史』1 古代国家」（石上英一氏と共著）〔『歴史学研究』367号、1970年〕、「共同体と奴隷制日本（律令体制）」〔『現代歴史学の成果と課題 2 共同体・奴隷制・封建制』青木書店、1974年〕などの業績が発表されている。後に井上光貞氏や石母田正氏の著作集の編纂や解説に関係されるようになるのもこうしたことが背景となっている。

修士課程修了後の1972年には、宮内庁書陵部編修課（研究職）に着任され、1992年以降は編集課長としての重責を担われることとなる。業務として史料の実物に接する機会が増えるにつれて古記録の翻刻にとりくまれ、まず米田雄介氏と共編での史料纂集『吏部王記』〔統群書類従完会会、1974年〕刊行が開始された。

本館との深い関係は本館常設展示第二室の開設にあたり、すでに1980年に外部の展示プロジェクト委員を務められた時から始まっていたことは注目される。

1994年までのお仕事は、主著である『古代文献の基礎的研究』〔吉川弘文館、1994年〕にまとめられたが、いずれも短期日には成し遂げることができない貴重な労作ばかりである。1995年にはこれらの業績に対して、東京大学から博士（文学）の学位を受けられている。これ以外にも影印本の書誌解題などは多数にのぼる。

先生の業績を大きく分けるならば、第一に『続日本紀』を中心とする正史の書誌的検討が挙げられる。蓬左文庫本とその系統の写本の問題点を論じられた「蓬左文庫所蔵『角倉本続日本紀』の諸問題」〔『続日本紀研究』254号、1987年〕、や「蓬左文庫本『続日本紀』解題」〔『続日本紀 蓬左文庫本』第5冊、八木書店、1993年〕などはその代表的な研究成果である。これらにより、蓬左文庫本の異筆の書き入れは角倉素庵によるとの見解や、金沢文庫旧蔵本部分は重層的な構造をもつ複雑な写本

であることを解明された。また「東山御文庫本『続日本紀』の周辺」[『続日本紀研究』300号, 1996年]は、写本に付された附箋の意義について検討することで、近世における写本のあり方を考察したものである。石上英一氏と共著の「(続日本紀)書誌」[新日本古典文学大系『続日本紀』1, 岩波書店, 1989年]および、各巻の原文校訂は、その集成的な業績と位置付けられる。古代史研究に活用される『続日本紀』定本の確定作業は、学界共通の史料の基盤の整備という点で多大な功績といえる。

第二には本館蔵田中本『令集解』、東山御文庫蔵の『延喜式覆奏短尺草写』などの法制史料についての研究が挙げられる。「田中本『令集解』覚書」[『古代文献の基礎的研究』吉川弘文館, 1994年]では、位置づけが不明確であった田中本が、現存しない山田清安本そのものではないかとの想定がなされている。

さらに文献研究を基礎として国司交替制度を検討されたものとして「不与解由状と勘解由使に関する試論」[『古代史論叢』下巻, 吉川弘文館, 1978年], 「検交替使帳の基礎的考察」[『書陵部紀要』26号, 1975年]などがある。前者は、官人交替制度を不与解由状の書式と勘解由使の改廃により論じたもので、後者は宮内庁書陵部蔵の「筑後国検交替使実録帳」の配列を検討することにより錯簡を正し、制度史的検討を加えたものである。

これ以外にも書陵部での業務に関係した古記録などの書誌的考察や平安時代の政務・儀礼および村落史について講座へ執筆したものなど、多数に及ぶ。

なぜ写本系統の研究が必要かについての課題意識については、写本研究が自己目的化するのではなく、わずか一文字の異同が大きな議論を呼ぶまでに精密化した古代史研究の現状からする当然の要請であるとの認識を示されている。そのうえで吉岡先生は、最大限の客観的な情報をできるだけ恣意を加えずに検証可能な形態で提供することが、書誌研究の大前提として位置付けられているように思われる。

1996年の本館への転任直後から、総合展示第一室「律令国家」「正倉院文書」(1997年3月公開)および第二室「王朝文化」(1998年3月公開)の暫定改善を担当された。とりわけ典籍類の解説プレート更新に豊富な学識を発揮されている。企画展示では、歴博創設20周年記念展示「古代日本文字のある風景－金印から正倉院文書まで－」(2002年3月～6月開催)において、主に古代の文房具や紙についての解説を担当されている。

特筆すべきは、「人間文化研究機構連携展示 うたのちから－和歌の時代史－」(2005年10月～11月開催)の展示代表として尽力されたことである。機構発足直後の困難な時期において国文学研究資料館との密接な連携をとりつつ、『古今集』や『新古今集』を中心とする和歌文学を素材に、歴史展示としてはじめて公開されたことは大きな業績として評価される。展示図録『うたのちから－和歌の時代史－』も比較的地味なテーマにもかかわらず国文学および歴史学双方で好評を得て完売となり、さらに会期中に開催された歴博・国文研共同フォーラムを基礎に刊行された『和歌と貴族の世界－うたのちから－』[塙書房, 2007年]は学際的な人文学研究の試みとして貴重な成果といえる。この展示は人文学の連携を示す機構発足当初の重要な活動として位置付けられ、高い評価を得た。

この連携展示は、いずれも吉岡先生を研究代表者とする本館における基盤研究「『高松宮家伝来禁裏本』の基礎的研究」および機構連携研究「中世近世の禁裏の蔵書と古典学の研究－高松宮家伝

来禁裏本を中心にして－」の成果でもあった。館の重要なコレクションである「高松宮家伝来禁裏本」の基礎的研究がなければ不可能な展示でもあった。その貴重な成果の一端は、小川剛生氏と共編の『禁裏本と古典学』[塙書房, 2009年] および『高松宮家伝来禁裏本目録』[分類目録編][奥書刊記集成・解説編](2009年)として示された。

この間、2001年から3年間にわたり歴史研究部長、さらに続けて2004年からはさらに3年間にわたり副館長の重責を担われた。本館が2004年に人間文化研究機構の一機関として法人化し、再出発するまでのまさに激動期にその職務を担当されたことになる。

一方、教育面では1999年以降は総合研究大学院大学文化科学研究科日本歴史研究専攻の教授を併任され、大学院生を熱心に指導されて、博士の学位に導かれた。さらに、國學院大學・東京大学・早稲田大学・国士舘大学などでも学部・大学院の教育指導にあたられた。さらに、2002年からは、文化庁文化審議会文化財分科会第一専門調査会専門委員および文部科学省教科用図書検定調査審議会臨時委員として活躍されている。

先生の広い学識と温厚誠実な人柄を慕い、文献学研究を志す若手研究者が多く集まり、彼らの模範となり、かつまとめ役として、これまで大きなプロジェクトをこなしてこられた。私も、正倉院文書複製事業において年三回長期に奈良の正倉院事務所で一緒に仕事をする機会を与えられたが、休み時間の雑談において、現在における宮中儀礼のお話などをお聞きすることが楽しみでもあった。今後ともご健康に留意され、後輩たちを引き続きご指導していただければ幸甚です。

(国立歴史民俗博物館研究部)